

佐伯と岡木田独歩 (註)

「救がざるの記」より

会員 山本 保

佐伯に来て、大手前「富永旅人宿」に投宿している独歩兄弟を訪問した山名藥氏は、その時の思い、出を次のように語っています。

「吾々が初対面の独歩を見て最も驚いたのは、その風采がひどく貧弱に見えたことだった。

水綿の紋着をぞんざいに着、よれた袴をつけ、ぶつき、ら棒を物言いとす、色目の悪い青年に對した時、教師というよりも書生くずれと云った感じがして、これが後任の教師なのかと、少々失望した。……」

「救がざるの記」を左に掲げ、佐伯滞在中の独歩の読書・創作、思想、信條、煩悶、交友などについて触れてみたいと思ひます。

明治二十七年六月一日（於坂本永年宅）

昨朝（五月三十一日）パンスの「To mouse」（日かたしを）を讀みぬ。早稲田文学を讀みぬ。源平盛衰記と讀みぬ。英雄論を讀んで、カーライルのシンセリテイ（眞実）を味ふなり。

（註）① パンスはスコットランド第一の詩人で、彼が歌曲「愛の光」は日本でも愛唱されてゐます。

六月四日

昨夜教会に於てカーライルのシンセリテイを説く。

ひたすら思ひつゞくるもの日「根原」なり。今日「たけとり」の一節をものす。

（註）① 源平盛衰記は源頼朝の家臣で、水軍提督の平氏と對つて來勤をなしました。後日鎌倉幕府侍所の次官に昇進しました。

② 「たけとり」は竹取物語のことです。かぐや姫が主人公として登場します。

「源平盛衰の戯曲」竹取物語の新解釈の創作に取り組んでゐる様子がかうかわれています。

六月十一日

昨夜を以て「根原」の第一シーン（情景）成る。

六月十二日

昨夜「根原」第二シーンはじめ成る。

六月十五日

昨夜「景時」を作る。

六月十六日

吾をして山と一つ信仰に至らしめよ。

③ シンテの信念を如何。カーライルの信念を如何。省みて

近代的思想と見る。寒くこれ水上の藻の如し。

(註)① マンテロイタリヤの詩人、依り「詩曲」は有名です。

ル・テルドイソの神学研究者並に宗教改革者で「聖書カドイツ語訳」を著しました。

六月十八日

昨夜会堂(教会)に感話す。

感話する処は信仰の決して言い易からぬ事、及び極力た友此の靈光を求むべき事、凡て吾が日々感ずる処なり。

本日徳富氏に送書す。此の不幸なる継子を如何にすきてふ題にて、女子教育の事に就き三林を著きて國民新聞に投ず。本日種痘す。

因元は荷物一個を送りかへす。本日より午前五時より授業をはじめ。 (註) 徳富蘇峰は熊本県生まれの有名を評論家です。「國民の友」「國民新聞」などを編集発行しました。

六月二十二日

午前今井氏に共小文を作る。

始めて東京大地震の噂をきく。海水浴を試む。

(巻) 今井氏は、山口中学校初等科時代の友人、後年判事になった。

六月二十三日

午前今井氏に共小書を作る。午後海水浴を試む。

東京の諸氏は地震の貝舞状を出す。

六月二十四日

徳富氏より端書来る。伴武雄氏より書状来る。血痕と痕及び帰省したると。返書と認めてはりぬ。

父より來書。吉見ハル嬢より來狀。

(註)① 伴武雄は独歩の友人で、この矢折りました。② 吉見ハルは父の看護婦で吉見家の二女です。

六月二十六日

今朝ウォーレルズウォーリスの「ハイランドガール」(スコットランドの歌)詩集(一)を讀む。

今井氏に与ふる小書を作る。國民の友二百三十号来る。讀む。「一代の風雲と文芸の題目」は讀むや感ぜざるに非ずと雖も、到底民友の流の言辭に過ぎず。

(註) ウォーレルズウォーリス(ウォーズワース)はイギリスの詩人です。一七八九年「熱情詩集」を發表して、新詩の運動を起しました。ウォーズワース詩集は独歩が愛読書の一でありました。

六月二十七日

靜かにウォーレルズウォーリスの句を福せんことを希ふ。

六月二十八日

午前中ナルトル・レザルダス(カーライル著書)の章を讀む。

今朝はウォーレルズウォーリスの詩を讀み及たり。共に深く感ずる処ありたれど、筆と口のおんはす能はざるなり。

哲人の観る処、痛感する処、信念する処、蓋し深し。告少しく其の消息を解す。

只を盡す。吾をして信ぜしめよ。

七月二日 (於録田旅館)

只だ一つの突然として吾が胸裡を往來する光あり。曰く、「哲人は真理に満足すしてふ<sup>①</sup>ネルソンの句の意なり。」

(註) ネルソンはイギリスの提督です。一八〇五年トラファルガー海戦で、フランス、スペイン連合艦隊に大勝しまし左が、惜しくも旗艦ビクトリア号上で戦死しました。

七月四日

午前中ウオールズウオースの「不死のオード」<sup>(象序)</sup>を読む。再読三読愈々其の妙諦を識得す。

彼は小児のインノーセント(むじやきさ)を、及び其の自由にして自然なる喜びを信じぬ。この「信」を通じ靈の不死を見たり。

昨日長田氏(鴛谷学館生徒長田福城)西京に上る。蓋し秘行なり。少年の妄想は憐むべし。

① 外交問題(日本と清國)愈々急なり。

「実利実益」の近代的思想、愈々其の声を高め来り、今や教育界も全く此のために交配せらるるに至りぬ。

「今井氏によふ書」、「竹取物語」、「景時」の三編悉く中止の姿なり。筆とるの余裕なきが如し。

一言す。「努力せよ。」

(註) 明治三十七年八月一日清戦争が始まりました。七月四日頃、すでに巨震急を叫ぶる際を状態に立ち至っていました。

七月七日

今井氏によふ書を作る。カーライルのサルトルを讀む。

夕暮、舟を海に泛べて漫航す。日清事件は如何、嗚呼人間は此の天地間に何と為さんとする。

七月十日

昨日徳富氏より来状。

宇宙は不思議なり。故に人間は不思議なり。人間は不思議なり。故に人間が行爲、信仰、言語は不思議なり。

ゲーテ、クリスト、カーライル、王陽明、ウオールズウオースは不思議に非ざるか。吾、直に不思議に非ざるか。嗚呼神よ。故に吾、神の前に個人の内記を嚴かに学んことを欲す。

之れ人間の不思議と学ぶ也。則ち宇宙の不思議と学ぶなり。則ち神の不思議と学ぶ也。吾のウオールズウオースてふ詩人(人間!)と考へて嘆に自然と更なる痛感せずんばならず。

嗚呼ヒトロー(英雄)! 又大無名の俗人! 大なる不思議よ。

(註) ① ゲーテはドイツの文豪者です。作品「若きヴェルテルの悲しむ」は青年愛に愛された。

② クリストはユダヤの國に生まれました。イエスキリストの生涯は新約聖書の中の四つの福音書に詳しく伝えられています。

③ 王陽明は明の儒学者で、また「知行合一」を唱えた思想家でもあります。

七月十二日

カーライルは何処に在る? 真に何処に在る? 彼何処にかゆまじし。ウオールズウオース何処にかある。凡

て遊ぎし人々今如何。

此の自然、嗚呼此の自然と、遊ぎし此等の詩人達と  
今ノ關係は如何。

西行は如何。シヨウベンハウエルは如何。吾が友は如  
何。古川氏は如何。

嗚呼友よ、友よ、吾が愛の切なるに連れて爾の死の事  
実に打たる。嗚呼黙して此の時閑空間の無窮の自然と  
個人とを見よ。

(註) ① 西行は京都の生まれ、平安時代の末から鎌倉時代初期に於  
ける歌僧で、作品「山家集」は世に知られてゐます。

② シヨウベンハウエルはドイツの哲學者で、「意志と表象として  
の世界」は著書です。

③ 古川氏は、山口中学校時代の親友で、おしくも夭折しまし  
た。

七月十四日

英雄崇拝は真理の信仰に出ず。宇宙は大道真神在ます。  
故に英雄は崇拝するに足るなり。自我は空なる。是カ  
ライルの真理に非ずや。バインズ、ウニールズワ  
ース、ゲーテ、孔子、カーライル、クロンウエル、ホ  
ーロ、クリスト、マホメット、釈迦、シルトン、シル  
レル等の文豪、予言者、此の故に学ばざる可からず。

彼等を學ぶは地上の神の黙示を學ぶ也。  
天の心と地の人との如何に結合せんれしかを學ぶなり。  
嗚呼若之を得たり。故に人其のもの、これ神のものに  
非ずや。

(註) ① 孔子は中國の春秋時代の偉大な政治道德家で、儒學の創  
祖です。彼の思想は「論語」によつて知ることが出来ます。

② クロンウエルはイギリスの政治家です。共和国、自由國とし  
ての政治を行つて、イギリスの民主化を促しました。

③ ポーロはイタリアの旅行探検家です。日本でマルコポ

ロと呼ぶ。彼の「東方見聞録」はよく知られてゐます。  
④ マホメットのイスラム教の創祖です。また全アラビアを  
統一して大帝國を創りあげました。

⑤ 釈迦は古代インドの思想家。仏教の創祖です。  
⑥ シルトンはイギリスの詩人、傑作「大樂園」の著者です。  
⑦ シルレルは、ゲーテとならぶ稱せられる、ドイツの偉大な詩  
人です。

七月十六日

昨日は日曜日、午前 中桐薩太郎に書状を出す。  
① ニソンの「イン、メモリアル」(追悼)を少し読んで少  
く思ふ付く。

実に然り、愛し、吾をして或人を愛せしめよ。凡ての  
人を愛し得るならば、如何に吾が靈の声を聴き得べき  
ぞ。曰く不死し、吾が声の希望は不死ならざる可から  
ず。之れ靈心の声なり。  
靈心の声を信せよ。否、靈心の声の外にして信すべ  
きものぞ知らず。

(註) ニソンはイギリスの詩人。哀歌「イン、メモリアル」は  
百三十一行から成る格詩です。

彼の思想は神の存在、靈魂の不滅を信しました。

七月十七日

昨日今井氏より来状、直ちに返書す。  
例の文章三枚を清書して送りぬ。

朝鮮の事、日に急なり。人間の事愈々意味あり。

七月十九日

昨日東京なる一番所教会(キリスト教牧師植村正久)より来  
状あり。教会の現状を告知せられ、夏日の炎暑を見舞

せらる。直ちに返書差し出し書きぬ。  
今朝國元（法山岩井所）より夏代々（夏橙）到着セリ。

七月二十一日

吾は到底瞑想を続けざる可らず。故に吾は到底読書思  
考の生涯を送らざる可らず。故に吾は到底文章を執て  
業となさざる不可。

ギリシアの歴史、ゲーテの文学、シエクスピアの技  
術。哲人義士個々の伝記。自然。印度の理想。

「時」。「愛」。「不死」。

紛々として吾が感想激昂す。

（註）シエクスピアはイギリスの劇作家、詩人です。一大悲  
劇「ハムレット」は有名です。

七月二十二日

思想、信仰、豈に此の朽つ可き内体に包まれたる一種  
の風にして止まんや。

神の美と愛と希望と此を永遠の靈なる真理として呼吸  
せざる可からず。

個人を学べ。歴史を知れ。

七月二十五日

余が思想感情の世界が、其の絶へざるうづつある声  
を人知れず、天地に向て挙げてある時は、吾が周囲の  
世界は如何なる紛々の塵しつゝあるか。

七月二十九日

吾が職分は詩なり。吾は詩人の外能はず。

吾は偏へば只々天と人生を思ふ。吾が凡ての感情は  
皆茲に帰着す。吾は凡ての他の吾を懐ふ。懐ふて或

は涙潸然。

故に只だ——此の他の吾に同情をそそがんと客観  
の詩人たらんことを欲し、而して又、吾が胸中の信念  
うづつたり。

故に又た堂々立論、以てカーライルの文章を伝道の法  
に用ひんと思ふ。

吾此の二途に迷ふ。迷ふを要せざることを。

七月三十日（佐伯離別の前々日）

紛々として吾俗に迷ふ。

瞑想もして此の生と神とを思ひ、反みて衝失す。神に  
あらずして其の友は誰ぞや。

小我を捨てよ。嗚呼吾家は凡ての吾の地上の生命に同  
情す。

神よ、吾をして此の同情に適したる事業を執らしめ給  
へ。

### 追記

二十四才の若き独歩は、明治二十七年頃、既に古に  
かけた人々の著書に触れ、その思想に共鳴し、共感して  
いました。

彼の博學と深い思索と信仰には頭が下がります。なん  
といつても明治中期の先覚者の一人でした。

（この項終）